

# 魯迅の翻訳に関する研究の現状<sup>1</sup>

陳 紅

## はじめに

魯迅の翻訳は、魯迅研究において極めて重要な課題である。魯迅の翻訳とは、魯迅が翻訳したものと、魯迅の作品が外国語に翻訳されたもの2通りに分けられる。本論で取り上げるのは前者の方である。

前者はさらに3種類に分けられる。一つは魯迅が外国語作品を中国語に訳したものであり、魯迅の翻訳の中で最も多い。二つ目は、魯迅自身が外国語で書いたのを中国語に訳したもので、全部で9篇あり、いずれも『魯迅日文作品集』の中に収められている。三つ目は魯迅が自身の中国語作品を外国語に訳したもので、「兎と猫」という1篇だけある。ここでは一つ目の、魯迅が外国語作品を中国語に翻訳したものを対象に検討していきたいと思う。

魯迅は1903年から1936年までの33年間にわたって翻訳事業に取り組んでいる。合わせて14カ国、106名の作家の216篇の作品を中国語に訳しており、総字数は300万字にも上るといわれる。

その中で日本語から訳したものは175篇で、全訳本の約8割を占めている。日本語の原本から訳したものは96篇で、他言語作品の日本語訳から中国語に翻訳したものは79篇である。その他に、ドイツ語から訳した作品が29篇、英語から訳した作品が2篇、底本がまだわかっていないものが10篇である(表1)。

表1 魯迅が翻訳した作品の概況

底本言語	直接訳	間接訳	不明	件数
日本語	96	79		175
ドイツ語	2	27		29
英語	0	2		2
合計	98	108	10	216

1 本研究は、浙江省哲学社会科学重点研究基地浙江工商大学東亜研究院項目(14ZDDYZS04YB)の助成による。

魯迅の翻訳に関する研究は1920年代から現在に至るまで、およそ100年近くにわたっている。中国においてこれらの研究は次のような視点から行われてきた。

## 1. 訳本について

訳本の考察に関する研究には、大体次のような二つの視点が見られる。一つは、魯迅が具体的にどのような本を訳したのかについてである。魯迅が翻訳し始めた頃は、彼の翻訳理念はまだはっきりしていなかったので、「斯巴達之魂」(「スパルタの魂」) などのような作品は著作なのか、訳本なのかわかりにくい。だが、そのような考察は、1938年出版の『魯迅全集』や1958年の『魯迅訳文集』、2005年の『魯迅全集』、2009年の『魯迅訳文全集』等では既に厳密に行われ、戈宝権らは「哀塵」などの作品の底本を考察している<sup>2</sup>。現在、魯迅の翻訳だったかどうかについてはほぼ確認されている。

もう一つは、魯迅の翻訳した作品の底本についての考察である。一部は既に突き止められている。上記の『魯迅全集』などの資料においては、底本の一部が紹介されている。また、李允経ら研究者が「落谷虹児の詩」等の底本を考察している<sup>3</sup>。しかし、底本についてはいまだはっきりしないところも多い。例えば、アンドレエフの『書籍』や『黯澹的煙靄里』の底本は日本語訳だったのか、ドイツ語訳だったのかは不明である。『青湖遊記』『波蘭姑娘』『生活的演劇化』『關於劇本的考察』『現代電影与有産階級』などの底本もまだ明らかにされていない。また、魯迅の訳本の底本を系統的にまとめた資料もない。

前述のように、魯迅の訳本の約8割は日本語の原本あるいは日本語訳を底本としたものである。しかし、既に究明された魯迅の訳本の底本に関する情報はほとんど中国語で紹介されているので、それらを基に日本語の底本を見つけるのは難しく、魯迅の研究者にとっては大変不便である。底本に関する情報が不足しているために魯迅研究に悪い影響をもたらしている例がよく見られる。例えば、『魯迅翻訳文学研究』では、ジュールス・ヴェルネ著の『地底旅行』の日本語訳の底本を朝比奈弘治の訳本としている<sup>4</sup>。しかし、それは間違いで、実

2 戈宝権「關於魯迅最早の兩篇訳文—「哀塵」、「造人術」」『文学評論』1963(4)、133-134頁。

3 李允経「魯迅和落谷虹児」『魯迅研究動態』1987(3)、21-23頁。

4 吳鈞『魯迅翻訳文学研究』濟南：齊魯書社、2009年、115-130頁。朝比奈弘治訳『地底旅行』は1997年に岩波書店から刊行。

際は三木愛華と高須治助の共訳<sup>5</sup>によるものであった。また、『魯迅研究月刊』に発表された「從＜亜歴山大・勃洛克＞三個訳本看魯迅的思想矛盾及整合」<sup>6</sup>では、「亜歴山大・勃洛克」（アレクサンドル・ブローク）の底本そのものを間違えている。この論文は魯迅の訳本と、韋素園・李雲野の共訳による訳本と、王凡西が訳した訳本を比較しながら、その相違点を見出し、またその理由について検討している。しかし、そこに問題がある。それは、三つの訳本の底本がそれぞれ違うからである。魯迅の訳本は日本語訳を底本にしてできたもので、他の二つの訳本は英語訳から訳したものである。魯迅の使用した訳本の底本が日本語で明記されていれば、そのような間違いは避けられたことだろう。

## 2. 訳本の特徴について

魯迅の訳本の特徴についての研究は主に次の2種類に分けられる。一つは、訳本を通して魯迅の翻訳姿勢を紹介するものである。例えば、「關於魯迅翻譯武者小路實篤劇作＜一個青年的夢＞的態度与特色」「＜羅生門＞魯迅訳文探析」などは、魯迅が原作の内容を削除する理由等について実例を挙げながら検討している<sup>7</sup>。

もう一つは、訳本自体の特徴を紹介するものである。例えば、『魯迅傳統漢語翻譯文体論』は、文体という視点から留学時代の魯迅の訳本の特徴を分析し、初期の魯迅の翻訳文体の変遷やその理由を検討している<sup>8</sup>。『魯迅作品中的日語借詞』は言語学という視点から、『月界旅行』や『地底旅行』が日本語からどんな影響を受けてきたかについて分析している<sup>9</sup>。また、『魯迅的欧化文字』は、近代化された中国語に注目し、魯迅の訳本を考察している<sup>10</sup>。

5 三木愛華・高須治助訳『地底旅行：拍案驚奇』東京：九春堂、1885年。

6 楊姿「從＜亜歴山大・勃洛克＞三個訳本看魯迅的思想矛盾及整合」『魯迅研究月刊』2014(4)、24-33頁。

7 楊英華「關於魯迅翻譯武者小路實篤劇作『一個青年的夢』的態度与特色」『魯迅研究月刊』2004(4)、66-71頁；何家蓉「『羅生門』魯迅訳文探析」『解放軍外國語學院學報』2009年(3)、83-87頁。

8 李寄『魯迅傳統漢語翻譯文体論』上海：上海訳文出版社、2008年。

9 常曉宏『魯迅作品中的日語借詞』天津：南開大學出版社、2014年。

10 老志鈞『魯迅的欧化文字—中文欧化的省思』台北：師大書苑、2005年、376-381頁。

これらの研究は素晴らしい成果を上げていると同時に、問題点も併せ持つ。例えば、張全之が指摘したように、上記の『魯迅伝統漢語翻訳文体論』は底本の文体を抜きに、訳本の文体だけを考察しているため、正真正銘の翻訳文体論とは言い難く、その結論もさらに検討する余地があるように思われる<sup>11</sup>。

また、『月界旅行』の魯迅の翻訳姿勢についての研究にも問題がある。例えば、「幻興中華：論魯迅留日時期之科幻小説翻訳」「翻訳家魯迅的“中間物”意識」「翻訳与文学之間」「翻訳家魯迅」などは、魯迅が『月界旅行』を翻訳する際に、清末の翻訳家林紆のように抄訳の姿勢をとったと主張する<sup>12</sup>。一方、卜立德の「魯迅的兩篇早期翻譯」は全く違う結論を導き出している。卜立德によると、魯迅は『月界旅行』の底本を抄訳せず、誤訳もほとんどないという<sup>13</sup>。このような大きな違いが出たのは、抄訳とされた論文が『月界旅行』の底本を取り入れておらず、卜立德は魯迅の翻訳の底本ではない英語訳を参考にしたからである。『月界旅行』に対するそれぞれの意見の是非を問うには、底本である井上勤訳『九十七時二十分間月世界旅行』（大阪：三木佐助、1886年）を視野に入れなければならないだろう。

### 3. 翻訳観について

魯迅の翻訳観に関する研究は、魯迅の翻訳観とはどういうものか、また、なぜそのような翻訳観を持つに至ったのかという二つの視点に集中している。翻訳観の内容に関する研究では、主に直訳と「硬訳」との関係に重点が置かれてきた。「能够“容認多少的不順”？」「論魯迅的“直訳”与“硬訳”」などがその代表的な論文である<sup>14</sup>。双方とも、魯迅が「硬訳」の翻訳姿勢をとったのは中国語をよりよくするためのだと主張している。前者は、魯迅の直訳を「逐次訳」

11 張全之「冷僻の選題，新穎の解析—評李寄『魯迅伝統漢語翻訳文体論』」『魯迅研究月刊』2009(1)、83-86頁。

12 李広益「幻興中華：論魯迅留日時期之科幻小説翻訳」『漢語言文学研究』2010(4)、88-93頁；崔峰「翻訳家魯迅的“中間物”意識—以魯迅早期翻譯方式的變換為例」『中国翻譯』2007(6)、14-18、95頁；王宏志「翻譯与文学之間」南京：南京大学出版社、2011年、276-277頁；王友貴『翻譯家魯迅』天津：南開大学出版社、2005年、7頁。

13 卜立德「魯迅的兩篇早期翻譯」『魯迅研究月刊』1993(1)、27-34頁。

14 王宏志「能够“容認多少的不順”？—論魯迅的“硬訳”理論」『魯迅研究月刊』1998(9)、39-50頁；陳福康「論魯迅的“直訳”与“硬訳”」『魯迅研究月刊』1991(3)、10-17頁。

と見なし、あまりにも「逐次訳」にこだわるあまり、かえって文章がごつごつして読みにくくなる場合は「硬訳」になってしまうと説明する。

一方、後者は、魯迅は文芸理論のような作品を訳す場合にだけ、「硬訳」の姿勢をとったと述べている。両者とも一理あるように見えるが、底本を取り入れて考察していないため、少し説得力が足りないように思われる。

魯迅の翻訳観の出所に関する研究成果はいくつもあるが、いずれもヨーロッパや中国の視点から考察されてきた。例えば、アメリカの翻訳理論家ヴェヌティは *The Scandal of Translation* で、ドイツのゲーテやシュライアマハーが魯迅の翻訳観の形成に影響を与えたと主張している<sup>15</sup>。また、『中国翻訳文学史』や「訳経意識：魯迅的直訳法」によれば、魯迅の直訳理念は「訳経意識」と深く関わっているという<sup>16</sup>。しかし、これらの問題について見逃してはいけないのは、日本と魯迅の翻訳との関わりである。魯迅は日本に留学した翌年（1903年）から翻訳を始め、日本で『月界旅行』『地底旅行』『域外小説集』などの訳本を出版した。ただし、1906年出版の魯迅訳の「地底旅行」は抄訳であり、1907年と1908年に書いた「摩羅詩力説」「人之歴史」などは、まだ著作なのか翻訳なのか明らかにされておらず、1909年出版の「域外小説集」は忠実な直訳である。つまり魯迅は日本に留学した時、抄訳から直訳調の全訳へと翻訳の理念を変えたのである。したがって、魯迅の翻訳観の形成を考察するには、魯迅が留学した当時の日本人の翻訳観を見逃してはいけないのである。

#### 4. 翻訳から思想形成へ

これに関する研究成果は数多く見られるが、最も多いのは魯迅と魯迅が訳した外国の作家との対照研究である。また、「魯迅所撰訳文序跋之於俄蘇文学的批評概説」「從「訳文序跋」看魯迅的比較文学觀及び方法論意義」などは、魯迅の訳本の序跋と外国文学の関係を論じており<sup>17</sup>、いずれも魯迅が序跋で外国文学に対してすばらしい見解を述べていると主張する。

15 Venuti L. *The Scandal of Translation*. London and New York: Routledge, 1998, pp. 178–89.

16 孟昭毅、李載道『中国翻訳文学史』北京：北京大学出版社、2005年、325頁；李文革「訳経意識：魯迅的直訳法」『求索』2005（11）、181–182、121頁。

17 高文波「魯迅所撰訳文序跋之于俄蘇文学的批評概説」『文艺理論与批評』2011（2）、101–108頁；李卓文「從「訳文序跋」看魯迅的比較文学觀及其方法論意義」『华中師範大学学报（哲社版）』1995（6）、104–107頁。

しかし、魯迅の序跋はすべて本人が考え出したものだとは言えず、この問題に触れる論文はいまだ見当たらない。「比亚兹莱」的中国旅程」と「略参己見」：魯迅文章中的“作”、“訳”混雑現象」では、「<比亚兹莱画選>小引」と『凱綏・珂勒惠支版画選集』序目』の出所を考察しているが、2篇とも翻訳の序跋に関する研究ではない<sup>18</sup>。

魯迅の翻訳活動を紹介した成果は多くある。例えば、『魯迅翻訳研究』は魯迅の翻訳を三つの時期に分けて、それぞれの代表作を紹介している<sup>19</sup>。魯迅の翻訳は非常に多く、すべての訳本について考察することはまだできていない。これは、今後魯迅の翻訳を研究するうえで極めて重要な課題と言えよう。例えば、魯迅がなぜ長谷川如是閑の『聖野猪』を翻訳したかについてはまだ誰も触れていないようである。実は『聖野猪』は、当時の時代背景や魯迅の生活と深く関わっており、当時の魯迅の考えを読み解くには大切な資料である。

## 5. 私の研究

以上、中国における魯迅の翻訳研究の現状と問題点をまとめてみた。魯迅の翻訳に関する研究は、魯迅の文学の研究ほど盛んではないようであるが、近年、孫郁などの呼びかけによって、徐々に注目を集めるようになってきた。研究の内容に関してはそれぞれに傾向があり、その多くが底本を取り入れずに行われている。

私は先行研究を踏まえて、博士学位論文「魯迅の翻訳に関する研究—日本語の底本を元に」において、次のようなことを試みた。まず、「日本語の底本についての一考察」という一章では、前述の『青湖遊記』『波蘭姑娘』などの訳本も含め、魯迅が日本語から翻訳した作品の底本を系統的に整理し、インデックスを作成した。アンドレエフの『書籍』については、その底本が日本語訳『書物』（中村白葉訳、叢文閣、1920年）であることも解明した。

また、「魯迅の翻訳の特徴」という章では、今まで意見が分かれていた『月界旅行』における魯迅の翻訳の姿勢について、底本と魯迅訳とを照らし合わせ

18 徐霞「“比亚兹莱”的中国旅程—魯迅編《比亚兹莱画選》有關文化、翻譯、芸術的問題」『魯迅研究月刊』2010(7)、4-24頁；黃喬生「“略参己見”：魯迅文章中的“作”、“訳”混雑現象—以《<凱綏・珂勒惠支版画選集>序目》為中心」『魯迅研究月刊』2012(4)、17-28、34頁。

19 顧鈞『魯迅翻訳研究』福州：福建教育出版社、2009年。

て、その訳し方を研究し、当時の清末の翻訳家である林紘のような抄訳の姿勢との共通点と相違点をまとめることができた。

さらに「魯迅の直訳観と日本」という章では、魯迅が留学していた当時の日本人の翻訳観を紹介し、特に、森田思軒と二葉亭四迷が魯迅の直訳観に与えた影響を分析している。また、訓読や和文漢読法、日中言語比較という視点からもこの問題について論じている。

最後に「日本語底本を元に見た魯迅の文学翻訳」という章では、魯迅の訳本の序跋の出所を考察している。魯迅の訳本の序跋に書かれた一部の内容は、日本語の文学著書や日本人訳者が書いた「解題」や「序」などから書き写したものの、あるいは書き直したものであることを証明した。また、魯迅の留学時の生活状況や出版物、時代背景なども視野に入れて考察し、『聖野猪』<sup>20</sup>の中国語訳は、1924年冬から1926年に及ぶ北京女子師範大学の学生運動「女師大風潮」と深く関わっており、許広平をはじめとする北京女子師範大学の学生会を支持する行動の一環だったことを指摘した。

以上、魯迅の翻訳に関しては、拙論によってほんの一部は解決されたが、研究課題はまだたくさん残されている。例えば、『我独自行走』他、数篇の底本はいまだ不明である。『聖野猪』の他に、まだ翻訳の意図がわからないような訳本がいくつもある。また、ドイツ語訳の底本を基に魯迅の翻訳を考察することもいろいろできるはずだが、ドイツ語に通じていないため、引き続き日本語の底本を利用した研究を徹底させ、今後の課題としたい。

---

20 「聖野猪」は1925年6月1日に『旭光旬刊』で発表されたとされているが、私の考察では1925年5月26日に既に完訳されている。